

# ソロン・エヴェンキの一村（ガチャー）にみる 請負制度導入後における親族集団の新たな役割とその編成

ナスンムンク  
那孫孟和\*・米倉等\*\*

## 目 次

- |                                 |                   |
|---------------------------------|-------------------|
| 1. はじめに                         | 2) モホンの特徴         |
| 2. 調査対象民族および調査地の概要              | 3) ジューの編成原理       |
| 1) エヴェンキの社会                     | 4. 生産・財産関係にみる活動単位 |
| 2) 調査地の概要                       | 1) 牧畜と家畜管理        |
| 3. ソロン・エヴェンキ社会に観察される親族関係：ジューの編成 | 2) 土地管理と財産配分      |
| 1) 親族関係の呼称と特徴                   | 5. おわりに           |

## 1. はじめに

エヴェンキ社会は、中国の経済発展に伴って著しい変化にさらされている。本稿は、中国内蒙古自治区（以下「内モンゴル」）呼倫貝爾市（以下「フルンボイル」）鄂温克族自治旗（以下「エヴェンキ旗」）のソロン・エヴェンキ社会を対象とし（注1）、急速に変化する社会経済情勢の中、中国の少数民族と位置づけられているエヴェンキの人々が、生業とする牧畜をどのように営み、急速に変化した土地制度のもとで牧畜を支える土地をどのように管理しているかを検討し、伝統的な親族関係がどのような影響を受けているかを明らかにしようとするものである（注2）。

遊牧時代、人民公社時代を経て遊牧が禁止され定住化が進みさらに土地が世帯ごとの請負制へと変化した今日（注3）、生産様式は大きく変化してきた。とりわけ大きな変化は土地請負制によって牧畜が個別経営に分解されてしまったことである。このような変化の中で複数世帯からなるジューが生産活動や生活単位として重要な役割を果たしていることがフィールド調査から確認された。

速水佑次郎によれば、「村落や部族などの共同体は前近代的な組織として意識され、近代的発展の桎梏とみなされがちであった。だが実際には、（中略）近代的な経済発展を支えるに不可欠な組織の原理を提供している。」（速水, 1995, 254）。「共同体は合意に基づく協力により、分業を適切な協業関係へ調整する役割を担うのである。」（同上, 255）。速水のいう「共同体」とは濃密な人的交流によって形成される信頼関係で結ばれる集団である（同上, 254）。本稿はこのような事例の一つとしてジューに注目する。ジューは親族関係で結ばれた数世

---

\*東北大学大学院農学研究科博士後期課程   \*\* 東北大学教養教育院

帯からなり、牧畜の放牧のために共同で作業する集団である。

開発論では共同体が分業を適切な協業関係へ調整し組織の原理を提供しているとして積極的な役割を再評価しているが、共同体即ち伝統的關係により編成される組織が具体的にどのように編成されているか十分な検討がなされてはいない。本稿は新たに編成される共同的な集団組織というものがどのように編成されているかをエヴェンキの先行研究を踏まえながら検討し、そのうえでその集団がどのような役割を担っているか具体的に明らかにする。

エヴェンキ語でジューは、居住施設或は一つの家屋に同居する人たちの関係性が元々の意味であるが、現在では上記のような共同で作業をする集団という性格が強まっている。そこでこれまで注目されなかったジューに特に注目し、今日のソロン・エヴェンキ社会で果たす役割を事例的に観察する。以下で、まずエヴェンキ社会がどのように捉えられてきたか概観したのち、経済発展とともに生じている地域の変化、特に他民族との通婚、都市とガチャー（嘎查、村に相当）の二重生活の発生、伝統的な親族關係の現状、その内部構成に着目してジューの分析を行い、ジューがどのような集団として定義可能か検討する。これを踏まえて機能の面から牧畜における家畜管理と土地利用並びに中国政府に徴用された土地の補償金の配分の諸点に着目し、彼等の生活実態からジューの特質を明らかにする。

## 2. 調査対象民族および調査地の概要

### 1) エヴェンキの社会

エヴェンキ族は（注 4）、シベリア原住民の一つだったといわれており、「エヴェンキ」と自称している。エヴェンキとは「山の奥に住んでいる人」という意味である。今日、ロシアとモンゴル国と中国にエヴェンキは居住している。中国領内のエヴェンキ族はツングース・エヴェンキ（ハムニガン・エヴェンキとも呼ばれる）、ソロン・エヴェンキ、ヤクート・エヴェンキ（オルゴヤ・エヴェンキとも呼ばれる）の 3 つに分類されている（李・吉尔格勒他編, 2004, 1）。

本稿で扱うエヴェンキは、ツングース系民族の一つで、ソロン・エヴェンキは 17 世紀前半にロシアの統治を避けてアムル川に沿って現在の中国黒龍江流域に移住、のちに清朝に服属した。清朝は自らの八旗組織に基づいてソロン・エヴェンキを満洲的に再編し「ソロン八旗」とした（注 5）。この影響を受け、彼らの生業は狩猟から遊牧に変化し、かつ遊牧地域が限定された（鄂温克族自治旗誌編纂委員会編（以下「旗誌編」）, 1996, 79, 114）。その後 1905 年の時点で、現在のエヴェンキ族自治旗に相当する地域の人口はエヴェンキ 3,028 人、ダグール 716 人とモンゴルの一部族 651 人になった（注 6）。ソロン・エヴェンキはモンゴル族やダグール族と混住し、モンゴルと同様に平原での遊牧をしていた。1980 年代から内モンゴル各地域では、中国政府による牧草地の土地請負制度の下で定住牧畜が始まり、現在に至った。

エヴェンキは、国家再編や異なる文化圏との接触、特にロシア、モンゴル国、中国の国

境によって分断された結果、現在その差異の広がりが加速しているとみられる。最近の中国語やモンゴル語による研究では、エヴェンキ社会の現状、起源や伝統文化が報告されている。例えば『鄂温克族社会歴史調査』（中国国家民委編, 2009）や『鄂温克自治旗概況』（杜哈拉編, 2008）など、モンゴル語では『鄂温克族民俗文化研究』（斯仁巴图他編, 2008）などがある。他に上牧瀬三郎（1940）、秋浦（1962）、クネヒト・ペト（2005）、柳澤明（2007）、龔宇（2009）らによるソロンまたはオルゴヤ・エヴェンキに言及した研究報告がある。しかし、日本、欧米でのエヴェンキ社会の研究の多くは、後述の Anderson も含めロシア領内のトナカイ遊牧を営むエヴェンキを含む北方ツングースを対象にするものである。

ジューのように親族関係を基礎とするとみられる集団の編成を明らかにするためには、伝統的親族関係を理解しておく必要がある。従来の研究報告としてよく知られる『トナカイに乗った狩人たち——北方ツングースの民族誌』（トゥゴルコフ, 1981）は、ロシア領内のエヴェンキ社会の日常生活、慣習などを詳細に描き、エヴェンキの社会を支えていたのが氏族制度であったという。また、シロコゴロフの文献は、ツングース諸族を尋ね彼らの生活様式と社会構成を詳細に記録し、氏族が彼らの生活の中で大きな影響を与えていたとしている。ツングースの人々の間では、氏族が彼らの生活すべてであり、同氏族内の結婚の禁止、生存のための狩猟地の割当などについては氏族の「長」の命令に服従しなければならないという（シロコゴロフ, 1942, 391）。これから、エヴェンキだけを対象にした訳ではないが、氏族（クラン）という集団、社会制度がツングース系の民族にとって重要な役割を果たしていたと言える。氏族とは第一に神話、伝説上仮定された出自によって組織された社会集団である。父親又は母親を通じてたどる単系出自で、族外婚をとまなう社会集団である。平等対等な原則を持つ軍事的・宗教的・経済的組織であるとされる（石川他編, 1997, 331）。

トゥゴルコフは、エヴェンキとシベリアの他のいくつかの少数民族の間では 1920 年代まで氏族制度が保たれていたとする（トゥゴルコフ, 1981, 110, 113）。エヴェンキ族の研究者の著作としては『鄂温克族社会歴史』（吴守貴, 2008, 487（吴守貴については注 14 を合わせて参照のこと））、カ麗娜の研究（2012）などがある。それぞれ黒竜江省にいるエヴェンキおよびオロチョンの社会の伝統的狩猟について報告し、父系血縁関係による氏族社会の特徴があるという。他方、中国国内のエヴェンキとの関係は不明だが、Anderson はエニセイ河谷下流域のエヴェンキについて詳細な研究報告をしている。その第 8 章では、現在のシベリアのエヴェンキについて双方的親族（bilateral kin）があるとしている（Anderson, 2000）。さらに、少数民族が民族内婚規制（national endogamy）を採った場合、若い人々が婚姻相手を見つけることが難しいなど親族関係の危機（kingship crises）に直面したエヴェンキを含むツングース系の人々の婚姻戦略について報告している。これらの既存研究のみでは親族、出自集団の系譜関係を含めた実態が報告されておらず、従来氏族社会と言われたものが父系氏族だったのか母系氏族だったのか或いは両方あったのか不明で、氏族社会の構成と特徴を正確に把握できない。中国の開放経済下においても、フィー

ルド調査による実証的な研究が進んでおらず、実態は依然として明らかでない。しかしながら、ジュウの編成原理を検討するためにはこれらの先行研究特に氏族制についての研究成果を踏まえたうえで、筆者のフィールドの成果を突き合わせる必要があろう。

現在中国のエヴェンキ社会は定住化、経済発展、資源開発といった急速な変化に直面している。生業の核になる牧畜は個別経営に分解されることになったが、筆者のフィールド調査ではジュウのような親族関係が基礎とみられる集団が重要な役割を果たしていることが観察された。現代の牧畜や土地制度の下で、牧畜経営が全く個別・世帯別に営まれているわけではないようである。

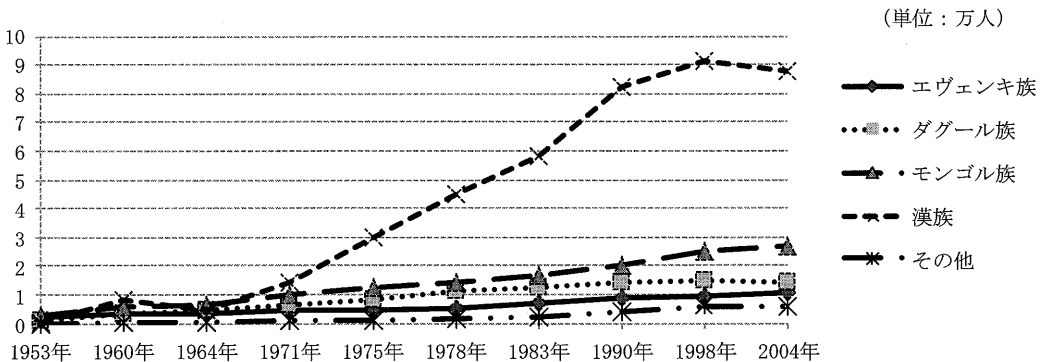
牧畜と家畜管理、土地利用と管理は、労働力の確保や機械の利用の点で個別の世帯のみでは遂行が困難であると考えられる。草地の徴用の補償金配分も補償された世帯が単独で確保したわけではなく、一定の親族の中で配分された。このように生活や生産において親族関係によって結ばれた集団が重要な役割を果たしている。その具体的な事例がジュウであった。そこでジュウに着目してジュウがどのように編成されるかを人類学の研究を踏まえて検討し、牧畜や土地利用などの生産活動がどのように行われているか明らかにする。

## 2) 調査地の概要

筆者は2012年8-9月、フルンボイル市エヴェンキ族自治旗のエヴェンキの牧畜民が居住するガチャーを中心に現地調査を行った。エヴェンキ族自治旗は内モンゴルの東北部、フルンボイル市の東南端、大興安嶺の西側に位置する。本研究は様々な変化が集約的に観察される地域のガチャーを調査地とした。牧畜民にインタビューを行い、日常活動、生活様式、社会関係について聞き取り調査をした。尚、本稿では調査地をBソム（蘇木、鎮に相当）Aガチャーと匿名で記す。Aガチャーは、Bソムに属する三つのガチャーの一つである。

### ①人口流入、他民族との通婚

過去60年のエヴェンキ族自治旗全体の人口変動を示したのが第1図である。流入により漢族が激増して旗所在地である都市部を中心に圧倒的な割合を占めるようになった。



第1図 エヴェンキ族自治旗における民族別人口変動

(出所) 旗誌編(1996)と現地調査資料に基づいて作成。

2010年現在、住民登録によるとAガチャーには301人が登録され、五つの民族から構成されている。最も多いのがエヴェンキ族で77%、モンゴル族とダグール族が各々9%を占めていた。しかし、登録上Aガチャーとなっているものの、他ガチャーなどに居住する者が43人、逆に他地域登録のAガチャー居住者が22人いたため、実際のAガチャー居住人口は280人だった。当ガチャーに居住する登録済と未登録の漢族流入人口は全人口の約12%に達していた。

他民族のAガチャーへの転入は60年代に始まり、最も多かったのが90年代であり、転入者の40パーセントを占める（第1表）。転入理由については、男女に関わらず婚姻による転入が多い。次に多いのは「婚姻関係者の血縁」である。現在彼らはエヴェンキ族と結婚することで、多くが既に当ガチャーの牧畜民として「農業戸口」に登録され、牧草地の請負権を得て牧畜業に従事している。ただし、漢族の中には、屋敷地内に土地を開墾して自家食用の野菜農園を設けている者もいる。

第1表 年代別性別他民族\*のAガチャーへの転入理由

(単位：人)

移住理由	性別	女性 転入年代別				女性計	男性 転入年代別					男性計
		2000	1990	1980	1960		2000	1990	1980	1970	1960	
トラック運転士											1	1
婚姻		4	2	2		8	1	6	2			9
大工									1			1
「知識青年」地方支援										1		1
農業労働者										1		1
婚姻関係者の血縁			1		1	2		1	2			3
労働者の血縁			1		1	2						
総計		4	4	3	1	12	1	7	5	2	1	16

(注) \*他民族とは、エヴェンキ族を除き他の漢族、モンゴル族、ダグール族、ロシア族を含む。

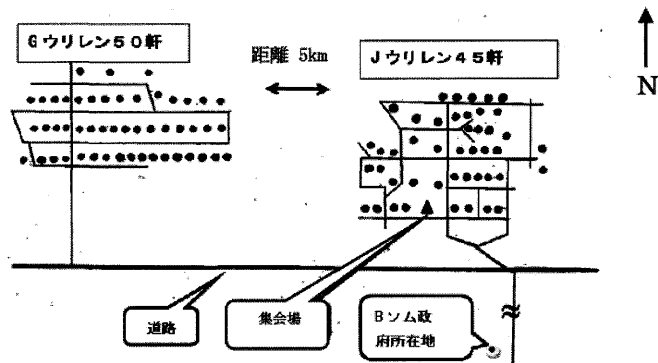
(出所) 現地調査により作成。

牧畜民の暮らす農村地域においては、漢族の多くは少数民族との婚姻によりこの地域内へ移住し、彼らの子供は男女を問わず少数民族として住民登録の民族欄に登録され(注7)、少数民族として扱われる。つまり、漢族でもモンゴル族でもエヴェンキの人と結婚した場合には、子供は慣習としてエヴェンキと認められる。これは中国政府の優遇政策によるものであるが、トナカイを飼養するフルンボイル市のオルゴヤ・エヴェンキに関する最近の卯田の研究においても同様の報告がある(卯田, 2015)。農村部へ移住した漢族に少数民族との結婚が多いのは、農村地域の人々との婚姻を通じて当地に住民登録でき「農業戸口」を得て、当地の少数民族と同様の土地請負権を取得する権利を得られるからである。このような権利取得が可能になったのは、1985年から始まった請負制度による。

## ②集落と居住様式

Aガチャーは2つのウリレン(烏力楞, urileng:集落)からなる(第2図)(注8)。今日のBソムでは、エヴェンキ語で集落を指す場合、ウリレンという。本稿では、Aガチャーの

現在の実態から、ウリレンは地縁による集落とみなしている。その1つは東にある集落でJウリレン（1940年代、既に集住地であった）、もう1つは西にある集落でGウリレン（1997年建設）である。このJとGという2つのウリレンは単に居住を共にする集落の性格が強いウリレンである。東西にそれぞれ46軒と50軒で、計96軒の家屋敷地が確認できた（第2図）。しかし、「戸口」登録上の世帯は128世帯であった（2010年時点）。このような差は、ガチャー外の居住者が登録していると共に、一軒当たりにも一世帯だけが居住するとは限らないからである。



第2図 ガチャーの見取り図

(注) 黒点は一軒の家屋敷地、線は道路を表す。  
(出所) 現地観察により筆者作成。

A ガチャーのエヴェンキが居住する家屋は、40～50年代には、土壁作りの平屋になり、90年代後半から焼レンガ作りの平屋になった。以前は遊牧を行っていたため移動しやすいウグゲージューを使用していたが（注9）、定住化が進んだ現在では夏の間約2～3ヵ月にオトルに行く人しかウグゲージューを使わない（注10）。牧畜民自ら又は何世帯かから委託を受けた者が放牧のために請負地のオトルまで行き羊放牧を行うケースである。

### ③二重生活の発生とその要因

他民族の流入、通婚という大きな変化が進んでいると同時にエヴェンキの人々の就業も変化し、他のよりよい職業と快適な都市生活を求める動きも活発である。このことによつてエヴェンキの人々が直面するのは教育とそのための言語そして居住地の選択である。

従来エヴェンキはモンゴル語で教育を受けることが一般的だったが、現在は中国語で教育を受ける生徒が増えている。人口流入により、エヴェンキの土地にも漢族が増え中国語の必要性が急速に高まり、また就業に際しても中国語が有利とされる傾向がある（注11）。特に高学歴を目指しより優れた教育を受けようとする者にとっては、中国語による教育が必須となっている。ソムや鎮という単位の地方の小中学校の多くが統廃合される傾向にあり、Bソムの学校では生徒数が2000年代に入ると減少し、結局現在は小中学部に通う生徒

がいなくなり、幼稚園だけが残っている。良い教育を受けさせるために都市部の学校に子弟を寄宿させる傾向が強まり、一つの世帯がガチャーと都市の二ヵ所に分かれて暮らす二重生活が急増している。

現在の A ガチャーの小学生は全員、都市部自治旗庁所在地の同一ジューの親類の家に寄宿して通学している。後に詳しく述べる C ジューの事例では、2012 年現在、それまでに二世帯 18 人が小学校以上の教育を受けていたが、うち 16 人がガチャーを離れ都市部に寄宿した。家庭の年配者が学校の近くに家を借り生徒を送迎する、或いは同じジューの親族や知り合いの家に寄宿させるなどしている。同一ジュー以外の家庭に子弟を寄宿させる場合、寄宿費として月 600 元程度（2012 年時点 1 元は約 13 円、自治旗の牧畜民 1 人当たり年間平均収入は「鄂温克族自治旗 2012 年国民经济社会发展統計公報」によると 12765 元）が必要である。また経済条件が恵まれた家庭では、一家で都市部へ引っ越し、ガチャーの家や家畜の管理などを同一ジューの親族や契約した労働者に頼むこともある。

前述のように A ガチャーに住民登録をしながらガチャー外に居住する者が 43 人あった。これは、経済的に恵まれた人々を中心に特に子弟の教育のための都市とガチャーの二重生活といった状況が進展しつつある証左といえる。その際ガチャーに残した生業である牧畜の継続をジューに頼る事例が増えている。二重生活のような生活面以上に生産活動においてジューは重要な役割を果たしていると思われる。以下では牧畜生産がどのように維持されているか、ジューを中心に検討する。

### 3. ソロン・エヴェンキ社会に観察される親族関係：ジューの編成

次節で詳しく検討するが、牧畜や草地の管理、財産の配分と処分、加えて二重生活を支えるうえで親族関係が重要な役割を果たしている。親子からなる核家族や直系家族のみでこれらの課題は処理できていないようである。本稿は共同行動を担う最小単位がジューであるとみている。そこでジューを支える親族関係に注目し、この親族関係がどのようなものか以下に検討しておく。

#### 1) 親族関係の呼称と特徴

エヴェンキの伝統的社会構造は、ハラ（哈拉）、モホン（莫昆）、ニモル（尼莫尔）からなる（旗誌編, 1996, 115）。ハラとはクラン（clan: 氏族親族集団）であり、ハラに含まれる者は当該クランの構成メンバーである。このようなクラン社会であるとされるエヴェンキの親族関係の現状をその階層構成、出自と帰属意識、婚姻関係の観点から検討してみよう。

現在、ソロン・エヴェンキには、トゥグドン（涂格敦）、ドルル（杜拉尔）、ナッタ（那哈塔）、ハーハル（哈哈尔）、バイエーヘル（白亜格尔）、ヘールデヘル（何勒特依尔）とボリジギル（特勒吉格勒）の 7 つのハラが存続している。人口規模で見るとトゥグドンとドルルが最も多く（注 12）、バイエーヘル、ヘールデヘル、ボリジギルがそれらに次ぎ、ハーハル、ナッタは少数である（国家民委編, 2009, 310）。調査地 A ガチャーの場合、人数ではトゥグドン、ドルル、ハーハル、ナッタの 4 つのハラが大きい。かつてはハラ毎にハ

ラ会議が行われ、ハラ内の重要事項について協議し、モホン間の遊牧地の利用と関連する重要事項などについて調整と決定をしていた。請負制度が行われる前の時代、ハラ会議が慣習的放牧地の割り当てを定め、遊牧範囲を監督していた。

モホンとはハラの下部組織（サブクラン、sub-clan）を指す（旗誌編, 1996, 116）。モホン毎に能力のある者からモホンダーと呼ばれる一人の長が選ばれた。従来、定期的に開かれるハラ会議はモホンダーによって開催された（注 13）。しかし、定住化によりモホン間の調整が必要でなくなった現在、ハラ会議はなくなり、モホンダーもいなくなった。

このように現在ハラの役割はなくなったが、エヴェンキと自称する人々は今でも各々のモホンの構成員であることを自他ともに認識している。同じモホンに属する人々は祖父母或いは曾祖父母を同じくして互いに血縁関係を認識している。呉守貴によれば（注 14）、ハラ（氏族公社）は当該ハラのもの他に、他ハラのもので当該ハラの男性と婚姻関係を結んだ女性、また養子と認められた者を含むとしている（呉守貴, 2008, 15）。とはいえ、嫁いだ女性も養子も自身の出自であるハラ名を変えることはない。このようなことは現実にはハラよりモホンのレベルで頻繁に観察される。モホンは出自を決定する規範としての役割を保持している。しかしモホン間の関係は、古い時代に系譜関係があったといわれる以外に、現在ではさほど重要な意味が認められない。ただクランであるハラとサブクランのモホンとの間にそれぞれ系譜関係があることは知られている。

A ガチャーには、6 つのモホンがある。J ウリレン（第 2 図）に居住するトゥグドン・ハラの事例をみると（注 15）、このハラに所属する人々は、ウッドグ・トゥグドンとニスフン・トゥグドンの二つのモホンに分かれる。モホンの内部は血縁的に非常に近い親族であるが、同じハラに含まれていてもモホン間の相互血縁関係は今では分らない。

第 2 表 オジオバの呼称

	本稿調査地		オルゴヤ <sup>2)</sup>	
	オジ	オバ	オジ	オバ
父方 年長 <sup>1)</sup>	ウッドグアバ a)	ネーネー b)	合克 (hekke)	額基 (ekki)
年下	エスヘ a)	グーグー b)	阿基 (akki)	額基 (ekki)
母方 年長	アミハン	エニヘン	合克 (hekke)	額我 (eue)
年下	ナグソー (ナーヌと呼ぶ場合もある)	ナーヌ	姑黒 (kuxie)	額基 (ekki)

注 1) 調査地においては、父方のオジオバのエヴェンキ語の呼称を現在は知る者がなく、現在はモンゴル語 a) と中国語 b) の借用呼称を使っており、父方と母方の呼称が同じではない。

2) フルンボイル市エルグナ旗内のオルゴヤ民族郷に居住するヤクート・エヴェンキを指す。ここでは、オジオバの父方と母方の呼称に若干の差がある。右揃蘭は父方と母方オジオバの呼称が同じことを指す（中国国家民委編, 2009）。

（出所）現地調査により筆者作成。

系譜関係の日常的な意識や認知は、父方と母方との間の親族呼称の違いに現れよう。父方と母方双方のオジオバの呼称をまとめたのが第 2 表である（注 16）。現在、父方のオジオバにあたる語はモンゴル語や中国語の借用がおこなわれている。エヴェンキ語の呼称が確



認できず、エヴェンキの言語に父方のオジオバ呼称があったかどうかは明らかではない。しかし母方のオジオバの呼称はエヴェンキ語であり、調査地の例では父方と全く異なっている。このことは母方との系譜関係の存在を示唆し、父方と母方の出自たるモホンが明確に区別されていることを意味している。しかし、C ジューの例でもみられるようにエヴェンキ同士の婚姻から生まれた子供は父方モホンを継承する傾向が見られる（第4図及び第3表）。

モホンが意識されるのは祭祀が催される際である。今日では、オボー祭事がモホンのレベルで行われる共同行動のほぼ唯一の機会になっている。各モホンに「自然信仰の神様」がいて、年に一回5月か6月にモホン毎にオボーを催す（注17）。サマン教（サマン：薩満とはシャーマンを指し、サマン教はシャーマニズムとされる）に結び付いた信仰の一種である。祭事を行う場合に、かつてはモホン毎にサマンがいて、人々を招集してオボーに参拝した。現在では、サマンがいないモホンが多く、モホン内でその意義を重視する人が中心となってサマンの代わりに祭事を催す。一つのハラに属する複数モホンの集団が合同で祭祀を行うことはない。祭祀はもっぱら一つのモホン内で行われるに留まっている。

モホンレベルでの外婚制はまだ存続している。婚姻関係についてトゥゴルコフ（1981）は「ロシアのエヴェンキ族氏族制の大きな特徴は外婚制である」と記述しているが、調査地域のエヴェンキも同様である。かつては同じハラに属するため通婚が慣習的に禁止されていたウッドグ・トゥグドンとニスフン・トゥグドンだが、現在ではお互いに通婚可能になり、現に通婚している。つまり、同じハラ内でも異なるモホンであれば通婚が認められるようになっている。しかし、同一モホン内の外婚制は依然として機能している（注18）。

あるモホンに属する父母、祖父母あるいは曾祖父母と血の関係があることがモホンのタイトルを継承する条件である。親族関係に関し、同一モホンに属している人々をバルチャ（balcha: 親族）と言う。しかしバルチャという場合は姻族つまり法定親属を含んでおり、中国の親属法の「親属」に相当する（斯波義信, 2012, 383）。ただし、同じハラでも異なるモホン同士の間では系譜関係が明らかではない場合が多く、バルチャとは言わない。

他方ニモル（nimor: エヴェンキ語の意味は「近い」）は、20世紀初頭までは、氏族的血縁関係を残しモホンを構成する下部集団（遊牧公社）だったとされる（李・吉尔格勒他編、2004、44）。遊牧などを支える血縁互助集団であり親族関係の最下位にあるリネージだったと推測される。だが現在のA ガチャーでは、70歳以上の年長者しか知らない語彙であり、ニモルを血縁関係の最小単位や生産単位の意味では使わない。中国建国の1949年以降、特に人民公社が成立するとともに、ニモルという言葉は消滅した。今日、土地の請負制により牧畜が個別の経営世帯に解体されたとは言え、次節で検討するように複数世帯の協力関係無くして牧畜経営は困難で、生活の様々な局面での互助的組織は不可欠と思われる。ニモルは氏族的血縁関係を残したモホンを構成する下部集団、血縁関係の最小単位集団だとすれば、ジューはニモルのようなものとして互助的親族組織として復活しているものと考えられる。

## 2) モホンの特徴

C ジューの事例からジューの編成上モホンが重要であることが観察されたが、そこでモホンに注目してジューがどのように編成されているかを検討する。特にモホンの役割に着目して、①外婚制の拘束、②モホン名の継承が生得的であるか否か、③系譜関係継承の傾向、④出自集団形成の有無、といった点を検討する。

第3表は、C ジューの構成員について、モホンへの帰属を確認するため系譜関係の継承をみたものである。構成員たちは父母のいずれかのモホンを継承しているが、父方のモホンを継承する傾向が強い。一方を継承しながらも、父母双方の外婚制の制約を受けて、いずれのモホンの異性とも婚姻関係を結べない。例外的に措置される場合もあるが、それは事実婚によってすでに子供が生まれてしまった場合などである（CC1C1 のケース）（注19）。

第3表 男女別モホンの継承：CジューのCF、CMの血縁子孫のみ  
(単位：人)

モホン名	母方継承	父方継承	総計
<b>M男性</b>	1	9	10
ウッドグ・トゥグドン	1	1	2
テゲン・ハーハル		6	6
他民族		2	2
<b>F女性</b>	4	9	13
ウッドグ・トゥグドン	3	2	5
テゲン・ハーハル	1	3	4
モンゴル・ダーット		1	1
他民族		3	3
総計	5	18	23

(出所) 現地調査により筆者作成。

第3表にみたように現在でも各自が帰属する氏族名がモホンのレベルで明確に確認できるのであるが、帰属の選択を決める条件が何であるか、父系を辿るのか或いは母系を辿るのかが明らかではなく、家族関係などの事情に応じて選択的に行われている可能性が高い。C ジューにみる限り父方のモホンを継承する傾向にある。しかし、他民族の男性と結婚の場合、その子供は母方のモホンを継承する傾向がある（第3図を合わせて参照のこと）。これは親族関係の危機に直面したエヴェンキを含むツングース系の人々の婚姻戦略に合致している。これらのことから、父方か母方のいずれのモホンを継承するかについて生得的に定まっていると断定することは難しい。

他方ウッドグ・トゥグドンの母方モホンを継承している女性は3人だが、3人は他民族の父を持つエヴェンキである。他民族男性との結婚によって生まれた子供の場合、民族登録においては他民族として登録される場合もある。この表の他民族には民族登録においてエヴェンキとして登録されているもののモホン名が確認できなかった者も含む。他民族と結婚して子供が出来た場合にはエヴェンキ側のモホンを継承することが多く、中国政府のエヴェンキを対象にする優遇政策に沿った対応の結果でもあるが、もともと他民族との婚姻

を繰り返してきた場合が多く、民族を守る婚姻戦略の結果ともみられる（注 20）。この表の事例で見える限りでは、父系ルールがあった可能性は高いが、女性が他民族との婚姻を繰り返せばエヴェンキとしての出自を捨てない限り母系を辿ることになる。このような一見母系の系譜の傾向は、多数の他民族に囲まれて通婚している場合に可能性が高くなる。

以上のことから、父方母方の系譜関係はモホンを通じて分かり、単系リネージが父系的に編成されてきた可能性はあるが、明確な父系出自集団としてのモホンの組織は観察されない。A ガチャーにおいても遊牧や牧草地の管理、維持活動におけるモホンの氏族としての政治的調整機能はすでに失われ、その集団や組織としてのまとまりはない。しかし、帰属意識が父母のどちらかのモホンを継承することから、モホンは帰属を支える親族関係の機能を保持し、氏族（クラン、サブ・クラン）の特徴を残しているといえる。

他方、本稿が着目するジューは、モホンが明らかな親族（姻族を含む）から成り立つところから、自らの帰属を定める集団としての特徴が認められる。ジューはモホンによって定められる系譜関係を内包していると言える。

以上、ジューの編成を明らかにするためにモホンを検討した結果をまとめると、モホンは次のような特徴を持つことが明らかになった。

1. モホンは、外婚制の単位として依然として重要である。父母双方のモホンとの内婚ができないというルールが生きている。
2. モホンの帰属は、概ね生得的に決まるが、他民族との結婚など時々状況によって父方または母方を選択的に決められる。
3. 父方母方の系譜関係は、モホンを通じて分かる。両親がエヴェンキの場合は父方のモホンが選択される傾向が強い。
4. 各モホンを単位として土地や家畜などを共有するなどの実態的組織活動はみられない。生得的に限定された成員が、共同して行動し意思決定する政治的社会的単位としての実態もない。つまり機能集団としては存在しない。

単系出自では父方か母方のいずれか一方を継承し、婚姻によって成員権が変更されることはない。この点は調査対象ガチャーの例でも同じだが、成員権伝達の性が厳しく限定されているとは言い難く、父方、母方いずれかのモホンを選択する余地がある。ただし、子供は父母いずれのモホンの者とも婚姻できない。以上の点から、モホンを単系または二重単系の原理で編成される氏族（クラン、サブ・クラン）とみなすことは難しい。また、子供は両親のいずれかのモホンの一方を出生後に選択継承する点から、双方同時帰属はできない。つまり系譜関係は一方のみが選択される選系であり、デヴィッド・アンダーソンの双方的親族（bilateral kin）や共系出自（cognatic descent）と言い切るのは不正確であろう（注 21）。

### 3) ジューの編成原理

牧畜や草地の管理利用、財産の処分など多くの活動が家族からなる世帯によって個別に処理されているわけではない。世帯単位で生産や生活を営むことは不可能であり、すでに

みたように共同行動が必要な場面で数家族からなるジューが重要な役割を果たしている。ジューは牧畜などの生産活動の単位であると同時にモホンに着目すると出自集団としての特徴も認められる。ただし、モホンは系譜関係を定めるものではあるが、集団ないし組織としての実態を確認できるものではなく、そのような実態を観察できるのはモホンによって支えられるジューである。

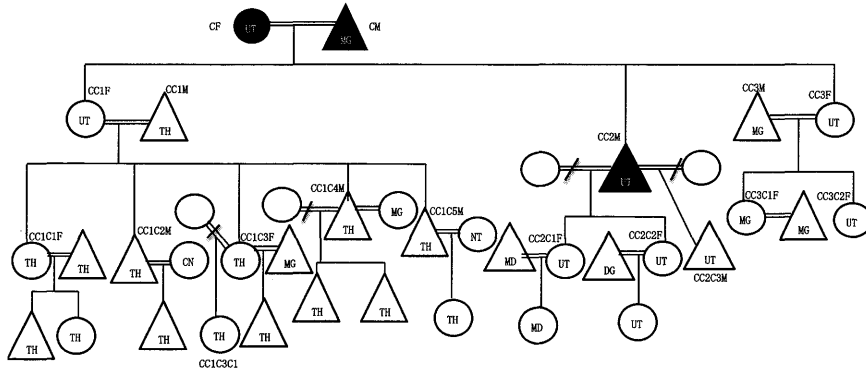
ジューは元来、単に複数の世帯の集まりを意味し、親族関係により編成される集団を意味したわけではない。しかし例えば現在の C ジューは、少なくとも二つのモホン、ウッドグ・トゥグドンとテゲン・ハーハルを含み（第3表）、そのうちの数では少ないが第一世代の CF のモホンをベースに親族関係でつながる複数の世帯からなる。ジューの各世帯のレベルでは父方と母方のモホンが交錯して（第4図）、子は父または母のいずれものモホンも継承しうが、最終的にはいずれか一方のみが選択される。

C ジューの場合、2 世代目（第3図の CC 世代）をみると、各々世帯として独立しているが、居住が近く、子供の教育、牛馬等飼育管理などの日常生活に関して相互依存関係が強い。このような世帯は、いずれかの共通するモホンを軸にとり結ばれている（C ジューの場合は、ウッドグ・トゥグドン）。そして共同作業を行えるような範囲に居住しているか、学童養育など生活面での相互扶助関係で結びついた世帯によってジューとしての集団が編成されている。補償金配分などにみられたようにジューの中では、兄弟姉妹が日常的な社会関係の核として重要な役割を果たしている。この兄弟姉妹の人数や集落内に近住するなど絆の強さが、各ジューの集団としての一体性や機能を規定している。

第3世代の CC1C の場合、男親 CC1\*M のモホンであるテゲン・ハーハルを継承して、C ジューには入れ子のようにテゲン・ハーハルが入り込んでいる。このため、現在のところ C ジューは、二つのモホンから編成される結果となった。ジュー自体も、第4図のように二つのモホンをコアに構成されているといえる。二つのモホンが重なっている子は、いずれか一方のモホンを継承するが C ジューの構成員であることに変わりはない。何故なら C ジューの第2世代 CC の系譜を引いているからである。第2世代 CC の姉妹兄弟がすべて死去すれば、この C ジューは、ウッドグ・トゥグドンとテゲン・ハーハルとに分解していくことになるかと推察される。

従って C ジューは一つの単系の最小の親族集団すなわちリネージとは言えないが、系譜が確認できる親族関係によって結ばれた複数世帯から編成される集団としてリネージ的な性格を復元していると考えられる。ジューはモホンが決める出自関係によってつながった近住する世帯によって編成されているが、集団や組織の無いモホン自体はジューの中にならば寄生して系譜関係を規定しているともいえる。このことによってモホンに対する帰属、即ちエヴェンキのアイデンティティが維持されている。

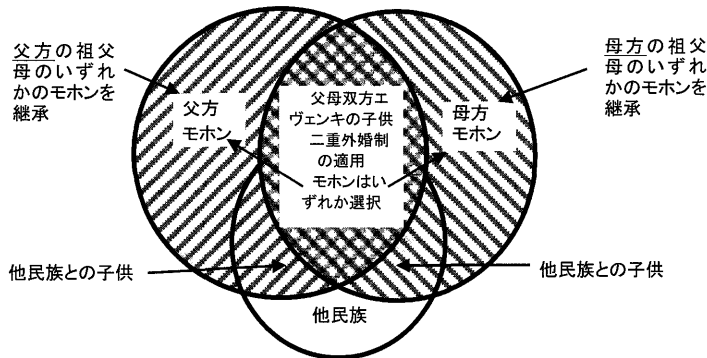
ソロン・エヴェンキの一村（ガチャー）にみる  
請負制度導入後における親族集団の新たな役割とその編成



第3図 C ジュー第一から第四世代目までの構成員図

(注) 縦横の実線は親子兄弟姉妹関係を指す。＝は夫婦関係、△は男性、○は女性、黒塗は死亡者、#は離婚を現す。個人代名 CF と CM は、それぞれ第一世代の F:女性と M:男性を現し、CC は第二世代、CCC は第三世代、CCCC は第四世代を表す。数字 1、2、3、4、5 は、子供の年齢を上から下の順で記している。△と○内のアルファベットは以下のエヴェンキ族のモホン名の略記である。TH=テゲンハーハル・モホン、UT=ウッドウグトゥグン・モホン、NT=ニスフントウグドゥン・モホン、MD=モンゴルダート・モホン。エヴェンキ以外には、MG=モンゴル族、DG=ダグル族、CN=漢族がある（「モホン」の意味については本文「親族関係の呼称と特徴」を参照のこと）。

(出所) 筆者作成。



第4図 ジューを編成する世帯の親族関係

(出所) 筆者作成。

モホンの関係をコアに編成されるジューであるが、生得的なモホンのステータスを持たない他民族との通婚が進みつつある現在、キンシップのない部分即ち第4図の他民族がジューの構成要素としてさらに拡大しつつある。エヴェンキの親を持つ者は片親であっても

子供はエヴェンキとみなされる（第4図の「他民族との子供」たちを指す）（注22）。他民族との通婚（現にCジューの第一世代の男性CMは、モンゴル族とエヴェンキ族との混血であった）によって生まれた子供たちがエヴェンキの片親のモホンを継承できるルールがあるからである。このため他民族との通婚を繰り返しつつもエヴェンキとしての社会集団を維持してきた。ジューは、牧畜経営が個別の世帯に制度的に分解された後、経営的に対応するために発生・増加しつつある複数世帯からなる集団である。ジューの編成は伝統的な親族関係に大きく依拠している。社会経済状況の変化に対応する中で親族関係が重要な役割を果たしていることが分かったが、そこでどのような変化にどう対応しているかを以下に事例的に検討する。

#### 4. 生産・財産関係にみる活動単位

遊牧停止、定住化に伴い牧畜の方法は大きく変化した。それにとまなう家畜の管理と土地利用、財産配分は親族集団の内部の調整機能を知る上で重要なポイントとなる。ここで、ソロン・エヴェンキの「ジュー」に注目するが、ジューとは一世帯から十数世帯からなり、親族関係のある成員とその結婚相手を含む複数の同居者や別居者からなり一つの生産協力単位でもある。調査地の概要において二重生活の発生について言及したが、これは生活面でのジューの重要な役割である。以下では生産面でのジューの役割について検討をすすめる。

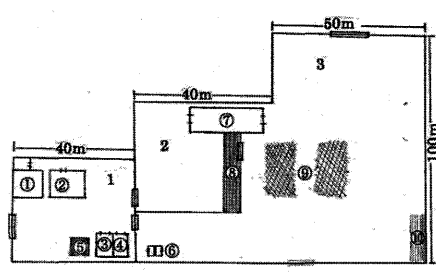
カ麗娜は、ジューとは最も下位の生産組織であり、ウリレンを構成する世帯であるとしているが（カ麗娜, 2012, 459）、Aガチャーで観察されるジューは、親族関係のある複数の世帯からなる。かつては、このようなジューの単位でオトルに行っていたのである。後述するが、ジューはAガチャーでは現在使われていない表現であるニモル（第4節1）参照）に類似する親族組織と考えられる。都市農村の二重生活におけるジューの役割についてはすでに述べたので、以下本節では牧畜と家畜管理、土地管理と財産配分について検討する。

##### 1) 牧畜と家畜管理

エヴェンキ族自治旗の総面積は、1万8727 km<sup>2</sup>あり、日本の岩手県より20%ほど広い。Bソムの総面積は920 km<sup>2</sup>、利用可能な草原面積は800.96 km<sup>2</sup>で全エヴェンキ族自治旗の利用可能草原面積の6.7%を占める。Aガチャーの面積は131 km<sup>2</sup>であり、その8割以上が牧草地である。エヴェンキ族自治旗の土地は大興安嶺の西端からさらに西へ広がる草原地域であったため、この地域の人々は移動しながら家畜を放牧していた。モンゴル式の遊牧は四季によって移動するが、ソロン・エヴェンキの場合、季節移動ではなく一ヵ月毎に牧草の良いところにオトルを設けて移動した。彼らは習慣的に旗の範囲内で自由に遊牧していた。人民公社時代にもこのような遊牧が行われていた。この遊牧は1980年代から大きく変化した。1985年の請負制度の導入による牧草地使用権の世帯への請負とその固定化によって、遊牧時代のようなガチャー領域を超える大規模な移動は見られなくなった。

現在は定住化したため生乳生産の酪農と牧畜が最重要の生業であり、概ね1haの屋敷地内に家畜を舎飼いしている（第5図）。普段は、96軒の屋敷地がある二つのウリレンに定住

し、夏は牧草地に家畜を放牧、秋には牧草地で草刈りをして越冬用の餌を集める。主に夏の間オトルに出かけるが、A ガチャーで観察された数は僅か3 オトル5 世帯である。請負制度によりその移動範囲はA ガチャー内のおよそ10km 四方に限られるようになった(第6図)。かつては遊牧、今日は、定着牧畜、酪農が人々の生活様式と収入を支える根幹である。世帯の請負草地とガチャー共有地のみが利用可能な土地で、ガチャー外で遊牧や放牧はできない。

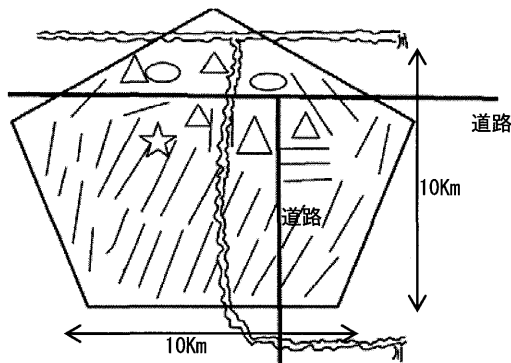


第5図 一軒当たりの家屋敷地利用例

(注) 図は一軒当たりの事例。

- 1 は生活区（面積約 2,000 m<sup>2</sup>）①旧住宅②新住宅③倉庫④車庫⑤石炭置場⑥トイレ  
2 は牛舎区（面積約 1,600 m<sup>2</sup>）⑦レンガ製牛舎（約 30 頭収容）⑧牛糞置場  
3 は牧草収納場（面積約 6,000 m<sup>2</sup>）⑨家畜の餌用干草置場⑩薪・木材置場

(出所) 現地観察により筆者作成。



第6図 A ガチャーの領域イメージ

(注) ○集落、△共有地、☆石炭鉱山、\線は請負地を示す。

(出所) 筆者作成。

かつての人民公社（ソム単位で編成）では、主に牛、馬、羊を飼育し、ガチャー単位で共有財産とし、ガチャーの中で遊牧した。人民公社時代の公社の行政や経済活動では、ウリレン（集落）自体は大きな位置を占めてはいなかった。このころ集落は規模も小さく、特定の目的、例えば数世帯からなるジューによる舎飼による酪農と牧畜、子供の教育のた

めの長期滞在、などの場所にすぎなかった。

1982 年から 1983 年にかけて人民公社が解体され（注 23）、共有財産であった家畜が個人配分された。それまで人民公社を構成していた A ガチャーの生産隊は共有の家畜を少しずつ個人に請け負わせ、残った羊などは売却した。1985 年 1 月に、「鄂温克族自治旗草原管理保護細則」が施行され、自治旗草原管理局が設立され（4 月）請負地の配分が本格的に始まった（旗誌, 1996, 388）。牧草地使用権の個人配分とその固定によって、人民公社時代のような規模の大きな遊牧は見られなくなった。ガチャーの牧草地の利用が、個々の牧畜民に、15 年間の使用権として与えられた。1998 年にはこの期間は 30 年に延長された。このような使用権の安定長期化は個人財産や収入の獲得意欲を刺激し飼育家畜急増の一要因となったが、その結果牧草地の地力の衰退が進むようになった。

次に、現在の A ガチャーの牛馬羊などの家畜の飼育方法をみておく。牛は、日昼は屋敷地外に放牧し、夜間は各牛舎に収容する。概ねガチャー単位で一群れになる為、ある牧夫が一人で日昼の監視をする。監視料は牛一頭あたり月 8 元である。牛の場合このような委託が多い。契約は一年毎に相談により更新されるが、彼らの間で契約と明確に意識していない。馬の場合、飼育頭数が少なく、所有者に関りなく年間を通じガチャーやソム単位で群にして放牧される。1 ヶ月か 2 ヶ月毎に、所有者が馬群を探し、頭数や出産状況などを確認する。羊の場合は年間を通じて放牧する。牧畜民が自ら放牧するか牧夫に委託するかなどその方法は様々である。現在、冬の間は広範囲に渡る放牧ができず牛馬は購入飼料と秋に刈った干草で舎飼いされる。冬でも羊は放牧されるが、集落の回りに限られる。

委託者と受託者間の契約は一年毎に更新され、期間は 1 年から 5 年にわたる。頭数の確認が年に 1 回行われる。第三者に勝手に再委託されるのを防いだり、自然災害や病気などで頭数が減少するなどを確認するためである。受託者は受託時の家畜頭数を保持しなければならないが、老病死による頭数減は免責される。売却は所有者の判断で行われる。羊の場合 1 つの群れが数百頭にもなることがある。受託した者は自分の家畜と一緒に一つの群れにして放牧するが、所有者は個体を認識できる（注 24）。高齢者や都市部にいて牧畜作業をできない人たちは、他人ではなくガチャーに残る同一 C ジューの親族に家畜を預ける。C ジュー内の親族間の受委託の場合、牛馬の委託料はなく、新しく生まれた家畜は委託者の所有になる。羊に限っては委託料などの費用はないが、生まれた子羊は受託者の取り分となる（ジュー外の者との契約の場合、生まれた子羊は委託者の取り分になる）。

現在、牧草地の請負権は世帯別に与えられているが、ジューの人々は牧草地を共有しないものの、共同で土地を利用し家畜と一緒に放牧することが多い。このようなジューが A ガチャーには約 12 ある。秋に牧草地で草刈をする場合には、ジューの男性メンバーが共同で作業する。食事の用意がジューの主婦の仕事であるが、特に分担が定められるわけではなく、相互に都合、必要を配慮して食事を用意している。馬を初めとして牛と羊の委託は、主にジューのメンバー内或いはジューメンバーの姻戚を優先に考え実施される。



土地の受委託関係も C ジューの事例で具体的に観察される。C ジューの利用している牧草地は次の第 4 表に示される。C ジューのメンバーは L1 から L5 の 5 つの請負地計 8,078 ムーが利用可能である。5 人の名義人のうち 4 人がガチャー在住、内 2 人が自作（土地番号 L2 と L3）、L1 は名義人 CC1M の子供が使用、L4 の名義人は土地を同じ C ジューのメンバーに放牧のため無償で貸している。L5 の名義人 CC3M は都市居住で、その土地と家畜を CC1M の子供らに預けている。CC1M（L1）、CC2C3M（L4）、CC3M（L5）が各々所有する家畜は、3 名義人の請負地に共同で放牧され CC1C4M と CC1C2M が世話している。

第 4 表 C ジューの土地請負状況

（単位：ムー（畝））

土地 番号	請負 名義人	性別		草地 面積	土地使用者	家畜飼育の受委託関係
		F	M			
L1	CC1*M		2,278	2,278	CC1C4M (親子関係)	CC1*M の家畜を CC1C4M が世話
L2	CC1C2M		2,000	2,000	名義人自身	自身
L3	CC1C3F	1,000		1,000	名義人自身	自身
L4	CC2C3M		1,000	1,000	CC1C3F CC1C4M	CC2C3M の家畜を CC1C4M が世話
L5	CC3*M		1,800	1,800	CC1C2M	CC3*M の家畜を CC1C2M が世話
総計		1,000	7,078	8,078		

（注）\*M の\*は其々 C ジューにとって姻戚者（法定親族）であることを示す（第 3 図参照）。ムー（畝）とは中国の土地面積単位で、1 ムー＝1/15ha、666.7 m<sup>2</sup>に相当する。

（出所）現地調査により筆者作成。

## 2) 土地管理と財産配分

A ガチャーの牧草地の一部は個人や企業に貸し出されている。さらに石炭開発と道路開発により、政府に徴用された土地もある。ここで、土地資源からの利得、特に資源と道路開発によって土地が徴用された際の補償金の配分がどのように処理されたかを観察することで、ジューの果たした役割を検討しよう。

2011 年に、使用していた牧草地で石炭が発見され、牧草地の一部が政府により徴用された。C ジューのメンバーの土地も一部その対象になり補償金が支払われた。CC1M を名義人として補償金総額 480 単位を受け取り（第 5 表の注参照）、CC1F が主に配分を取りしきって決定し分けた。第 5 表は別途説明した親族関係の単位であるモホン別にどのように分けられたかを示したものである。特に自分と同じモホンの者たちに重点的に配分したとは言えず、テゲン・ハーハル（第 3 図参照）を継承する夫との間にできた子供たち（兄弟姉妹の子供も子供と呼ぶ）に重点的に配分した。CC1F がほとんどの補償金を CC1 夫婦と子供に分けたことから、親子関係が重要な配分ルールであったことは間違いない。しかし、例えば CC2 の子供には配分がなく、彼らに比べて C ジューへの帰属感が強く関係が緊密だった CC3 の子供たちに 20 単位相当の額が配分された。CC3M はモンゴル族であり、都市部に生活していたが、CC1F の子供や孫の都市での就学に協力していた。このように補償金の配分にはジ

ユー内部の関係も考慮されていた。ただし、ジューの範囲を超えることはなかった。

第 5 表 ジュー内部補償金配分

(単位：金額比)

個人	ウッドグ・トゥグドン	テゲン・ハーハル	総計
	(母方モホン継承)	(父方モホン継承)	
CC1F	20		20
CC1C1F		50	50
CC1C2M		50	50
CC1C3F、CC 1 C3C1F	50 (CC 1 C3C1)	50 (CC 1 C3)	100
CC1C4M		120	120
CC1C5M		120	120
CC3C1F	10		10
CC3C2F	10		10
総計	90	390	480

(注) 金額比とは個人情報保護のため CC3C1F などに与えられた最小配分額を 10 単位とする相対比。

(出所) 現地調査より筆者作成。

配分されなかった CC2 の子供たちの状況は次のようなものであった。CC2C1F は他の地域のエヴェンキ族の男性と結婚し、A ガチャーから転出して夫の居住地に住み、夫の請負地で牧畜を営んでいる。C ジューの牧畜経営と無縁である。CC2C2F は他民族と結婚し、やはり A ガチャーから転出し、都市部に居住し牧畜経営をしていない。CC2C3M は自分の土地と家畜を C ジューの他の者に預け牧畜経営に関与していない。補償金の配分を受けなかったが、彼は当時未婚で結婚の際に必要な出費と家屋の建築費などを CC1 と CC3 たちが共同で負担することになっていた。この例は親族関係を前提としながらも牧畜の共同経営関係があるかどうか補償金配分の重要条件であったことを示している。また、CC1C4 と CC1C5 が多額の配分を受けた理由は、彼らが請負地を得ていなかったためである。

多額の補償金を手にしたガチャー住民の間には、都市部に居ながらガチャーの牧畜も営むという二重生活が起きている。補償金は人によっては都市で住宅を買うのに十分なほど高額であった。都市居住という行動は、子供の教育が主な理由である(注 25)。また、A ガチャーでは共同牧草地も徴用されたため、一定の補償金をガチャー単位で得ている。これは、ガチャーという地域単位の共有財産となっており、これを維持し増やそうと言う地縁的な共同行動を起こす契機となった。ガチャー委員会(全 6 人の委員は住民の代表からなり、日本の自治会に相当)全員が合議して、都市部で不動産を購入し賃貸収入を得るなどしている。運用益はガチャーの財政収入として使用されている。

請負地の獲得と相続は、中国の法に沿った方法で行われる一方、その相続時或いは利用に関しては、ジューの単位で調整されていることがわかる。さらに、鉱山開発に伴って支払われた補償金は、一見親子関係が重要にみえるが、兄弟姉妹間の人間関係、婚出などによる居住関係、牧畜経営における相互協力関係、系譜関係が考慮されている。系譜関係が

ジュー単位で一定の縛りをかけていることがわかる。他民族との通婚によりながらもエヴェンキの親族関係が強く意識され、言語の使用なども含めエヴェンキとしてのジューメンバーの帰属感の強い者に補償金が優先的に配分された。土地の相続、利用、土地を媒介にした利得に関する意思決定、他民族の婚入者に対する対応は第4図に示した親族関係をベースに行われている。

## 5. おわりに

経済発展に伴うソロン・エヴェンキの顕著な社会的経済的変化をまとめると以下のようなものであった。

1. 転入者が増加し農村部でも他民族との通婚が進んでいる。
2. 教育、日常において中国語使用が多くなり、エヴェンキ語が話せる人が減少している。
3. 都市農村二重生活など生活様式が急激に変化している。
4. 土地の請負開始により遊牧が停止されて、牧畜は個別世帯の経営に解体された。
5. 上記の諸変化に加え開発のための土地徴用などを通じて個別世帯では対応の難しい問題に直面し、これをジューの単位で柔軟に対応している。

現地調査では、社会的経済的変化に適応する上で親族関係が重要な役割を果たしているとの想定のもとに特にジューの事例に着目した。ジューの役割に関し、牧畜、草地利用、社会に大きなインパクトを与えた資源開発、経済開発に伴う政府による請負地の徴用と補償金の配分に注目した。さらに調査地のあるジューを事例に、伝統的親族集団であるハラ、モホンの現状を検討した。ハラ、モホンは観念として残っているが、集団として観察されるのは、家族だけでは営めない牧畜や財産処分で重要な役割を果たしている親族組織のジューである。ジューは次のような特徴を持つ。

1. 父母いずれかの親族関係によって結ばれた複数の世帯からなる親族組織であり、日常的な生活や経済活動に関して重要な協業を行う集団性が認められる。それゆえ、牧畜生業では生産協力単位とみられた。
2. 父方モホン母方モホンのいずれかを継承するものからなるエヴェンキを核として編成される。
3. 近年は、モホンを継承しないモンゴル族や漢族との通婚が進み、その成員の出自が複雑化している。婚姻相手が非エヴェンキであっても婚姻を契機にジューの成員とみなされる。ただし、子供は別として、いずれのモホンも継承できない。
4. 父母を共通にする兄弟姉妹が、日常的な社会経済関係の核として重要な役割を果たしている。したがって、この兄弟姉妹の人数や集落内に近住するなど絆の強さが、ジューの集団としての一体性や機能を規定している。

ジューでは父方と母方のモホンが交錯するところで形成される父母双方というよりも少なくとも一つの性のつながりを通して出自上の地位が得られるが、ジューはモホンの系譜

関係がない他民族出身者を加えた集団である。定住と請負地の獲得その処分利用を契機として経済活動を行う数世帯からなる生活集団でもあり、機能集団或いは生産協力単位となっている。ジューの出現の一般化については、さらに他の複数の集落での検証研究が必要とされる。

伝統的親族関係をベースに編成されたジューが果たしている役割は、教育などのために生じる二重生活の支援、労働力の融通、家畜の受委託、土地の共同利用管理等である。ジューは個別世帯では克服の難しい諸問題を共同で処理し、生産における協業関係、土地など資源の管理や配分を成り立たせている集団である。

近年の経済発展や資源開発に伴い、人口の流動化が進みエヴェンキの社会にも他民族が転入し通婚が進んでいる、土地の請負制により牧畜経営が個別化される、などの激しい変化にさらされながらも、今までのところ、ジューをベースに柔軟に対応している。ジューは、速水ら開発経済学者のいう前近代的な親族関係を基礎とした組織の一つと言えるが、このような組織を自生的に再編成することによって様々な社会経済の変化に対応している。こうしてソロン・エヴェンキの伝統的な親族関係そして民族としてのアイデンティティが維持されている。

- 注 1) 中国の行政組織が、調査地の内モンゴルでは、省レベルが自治区、県レベルが自治旗、鎮或いは郷レベルがソム（蘇木）、村レベルがガチャー（嘎查）である。
- 2) 本稿で親族という場合、特に断りがなければ、日本の民法や人類学用語のように婚姻による法定親族を含んでいる。
- 3) 請負制度（中国語で「個人承包制度」という）とは、1978年に人民公社の廃止後、土地の国家所有のもとで、農地の経営を世帯別が請負する制度である。内モンゴルにおける牧畜民の場合に「牧草地（中国語で草場という）」を請け負うことをいう。
- 4) 中国のエヴェンキ族人口は約3万人、ダグール（達斡尔）族（注6参照）の人口約13万人、オロチョン族（人口約8千人）の3民族は人口規模が小さい内モンゴルの少数民族先住民であり、中国の「三少数民族」と呼ばれる。本稿では、単にエヴェンキという場合には、中国国内のエヴェンキ族一般をさすが、コンテキストから、ソロン・エヴェンキであることが明らかな場合でも単にエヴェンキと記すことがある。
- 5) 清朝の八旗組織とは清朝時代のモンゴル地域に設置された支配機構で、満洲人が支配した階層化された社会組織、軍事組織のことである。
- 6) ダグール族の漢語表記は「達斡尔」で、日本では中国語読みに近い「ダフル」と呼ばれている。ダグール語の発音に最も近いのが「ダグール」であるため、本稿では「ダグール」とする。
- 7) 中国では1つの世帯を1つの「戸口」として戸籍登録が行われている。「戸口」登録情報は「戸口簿」という冊に記載され、「非農業戸口」と「農業戸口」の二種類がある。都市住民と公務員（役員）などの職のあるものは「非農業戸口」に、農村の農民は「農業戸口」に各々登録される。農村に居住し「農業戸口」と登録されることが土地の請負権を得る基本条件とされる。A ガチャーの場合、牧畜業を営む牧畜民であっても農村の農民と看做され「戸口簿」に「農業戸口」と記される。また「戸口簿」に民族欄があつて、民族名が記される。日本の戸籍は国民登録であり、親族登録であり、住民登録である。しかも戸籍間の連結機能により日本人の全親族関係が網の目のように登録されてい

- る。しかし中国の戸籍「戸口」には戸口間の連結機能がなく、日本の戸籍と異なる。
- 8) カ麗娜もウリレンを同様の集落という意味で用いている（カ麗娜, 2012）。李・吉尔格勒他編（2004, 44）によれば、ウリレンとは同一モホンからなる遊牧する牧戸（世帯）であったという。従来ウリレンは、親族関係の強固な集団によって構成されたものの、氏族などの出自を決定する親族集団自体を意味するものではなかった。
  - 9) ウッゲージュウ（uggejuu 又は urugejuu、語義は「家と部屋」）とは、エヴェンキ語で、簡単に組立ができる移動しやすい丸い屋根の居住施設である。ジュウとはエヴェンキ語の住む「家屋」を指し、または「うち」と言う意味もある。
  - 10) 当地域におけるオトルとは、牧畜民が羊群や牛群と共に一時的に集居地を離れ、簡易な生活用品を持ち、牧草の良い請負地・放牧地へ出かけるキャンプ地のことを指す（利光有紀, 1983）。
  - 11) 従来は、殆どの生徒は、小学校から大学卒業まで一貫してモンゴル語で教育を受けてきた。学校生活はおろか日常の生活でも、エヴェンキ語を使用する機会が急速に減少している。A ガチャーで使われている言葉はエヴェンキ語、ダグール語、モンゴル語、中国語である。
  - 12) エヴェンキ族自治旗に住むエヴェンキのトゥグドン、ドルル、ナッタ以外のハラを構成するモホンは不詳である。調査地のエヴェンキのモホン名はロシアに住むエヴェンキと違いがある（吳守貴, 2008, 129, 482）。
  - 13) 筆者の一人（エヴェンキ族自治旗出身）が子供のころ、祖父母から聞いたことによる。
  - 14) 吳守貴は内モンゴル、現ジャラントン（扎蘭屯）市出身のエヴェンキ族で、フルンバイル市の政治指導者の一人であった。2015 年現在、エヴェンキ族研究会の理事長を務めている。
  - 15) そのほか、A ガチャーにはドルル「杜（ドゥ）」、ナッタ「那（ナ）」、ハーハル「韓（ハン）」、またはハ（ハ）」がある。現在トゥグドンの場合は中国の住民登録上は姓氏として漢字の「涂（トゥ）」が用いられている。
  - 16) これらオジオバの親族呼称は調査地の事例である。エヴェンキの他の地域では、異なる呼称が使われる場合もある。
  - 17) オボーとは、元々石または木を重ねて作られ、山頂や峠のような高所に建てられる一種の標柱である。境界標識や道標としての役割を果たしていたが、そこで宗教儀礼が行われるようになってとともに自然信仰などの宗教的意味を示す参拝の場所と祭事になった。
  - 18) 現在のエヴェンキ族では結婚時に婚資のやり取りをする習慣はなくなったが、一般的には新しい世帯の生計のために夫方が結婚後の居住家屋を準備し、妻方が家の必要品と家畜を準備する。高額な「財礼（嫁の親に払う謝礼：現金）」を求められる漢族との通婚では、エヴェンキの夫方が高額な現金と住宅を要求される例が現れている。
  - 19) C ジュウの事例では、本人はテゲン・ハーハルの女性（CC1C1F）で、相手の男性の母方が他の旗のテゲン・ハーハルであった。このため両者は同族婚とみなされ、男性の母親が反対した。婚姻自体に反対であるという事情は現在でも変わらない。しかし、生まれた子供はテゲン・ハーハルのモホンに帰属し、男性の母親（男性の父親はモンゴル族である）は孫を自分のテゲン・ハーハルの成員として受け入れている。
  - 20) ただし、狩猟をやめ遊牧を始めた清朝時代より他民族（特にモンゴルやダグール）との通婚が進んだものと推定され、通婚の歴史は決して短いものではない。
  - 21) しかし、共系出自でも一方の親のみから成員権が伝達されることがある（石川他編, 1997, 357）。モホンはキージングの非単系出自（non-unilineal descent）、つまり父母双方というよりも少なくとも一つの性のつながりを通して出自上の地位が得られる仕組みである（キージング, 1982）とみてお

くこともできよう。

- 22) 例えば、第3図中（図では、\*を省略）のCC1C2\*F（漢族）、CC1C4\*F（ダグール族）、CC3\*M（モンゴル族）場合、その子供たちは、一方のエヴェンキの親のモホンを継承し、エヴェンキとされている。CC1の子供たちはCC1\*Mの夫方のモホンであるテゲン・ハーハルを継承している。
- 23) 当エヴェンキ族自治旗では「家庭経営為基礎的畜草双承包責任制」として1982年に世帯ごとの請負制度が導入され（旗誌, 1996, 388）。
- 24) 一つの家畜の群れを別の飼育者の群れと区別するため、ジュー毎或いは所有者毎に、羊は耳に切り込みを入れる耳印、馬は臀部の焼印、牛は（最近）耳札で識別される。従って、Cジューの構成員CC1C2M、CC1C3F、CC1C4Mが所有する家畜は同一種類の耳印、焼印である。
- 25) 当然ながら資金不足や都市での職がなく、子供のために一家で都市部に転居できない人が多い。その場合、家族の誰かが子供たちとともに間借りをして、オトル先のように簡単な生活用品のみで生活する。

## 参考文献

- Anderson, David (2000) *Identity and Ecology in Arctic Siberia: The Number One Reindeer Brigade*. Oxford University Press.
- B.A. トゥゴルコフ (1981) 『トナカイに乗った狩人たち—北方ツングース民族誌（加藤九祚解説、斉藤晨二訳）』 刀水書房。
- 李・吉尔格勒、羅淳、譚昕編 (2004) 『鄂温克族—内蒙古鄂温克族自治旗烏蘭宝力格嘎查（ウランボリガガチャー）調査』 雲南大学出版社。
- 杜哈拉編 (2008) 『鄂温克自治旗概況』 民族出版社。
- 鄂温克族自治旗誌編纂委員会編 (1996) 『鄂温克族自治旗誌 1958-1991 年』 中国城市出版社。
- 龔宇 (2004) 「転承と流変：使鹿鄂温克的馴鹿民俗の機能研究」 内モンゴル師範大学修士學位論文。
- 国务院法制事務室編 (2012) 『中華人民共和国・土地法典』 中国法制出版社。
- 速水佑次郎 (1995) 『開発経済学』 創文社。
- 石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男 編 (1997) 『文化人類学事典』 弘文堂。
- 卡麗娜 (2012) 「エヴェンキとオロチョンの伝統的狩獵」 『国立民族博物館研究報告』 36 (4), 457-492。
- 上牧瀬三郎 (1940) 『ソロン族の社会』 生活社。
- クネヒト・ペトロ (2005) 「大公安嶺のトナカイ・エヴェンキの公易ボグシヨルについて」 『アジア市場の文化と社会——流通・交換をめぐる学際的まなざし』 風響社, 157-189。
- 秋浦 (1962) 『鄂温克人の原始社会形態』 中華書局。
- R.M. キーシング (1982) 『親族集団と社会構造』 未来社。
- 佐々木史郎 (2002) 「クマ祭に集まる人々-狩獵儀礼に表出するエヴェンキ族の社会構成原理について」 『国立民族博物館研究報告』 10 (2), 451-480。
- 斯波義信編 (2012) 『中国社会経済史用語解』 東洋文庫。
- シロコゴロフ (1942) 『北方ツングースの社会構成』 岩波書店。
- 斯仁巴図、安娜編 (2008) 『鄂温克族民俗文化研究』 内モンゴル文化出版社。

- 利光有紀（1983）「“オトル” ノートーモンゴルの移動牧畜をめぐって」『人文地理』35（6）．
- 卯田宗平（2015）「ポスト「北方の三位一体」時代の中国エヴェンキ族の生業適応—大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例—」大塚健司編『アジアの生態危機と持続の可能性』アジア経済研究所．
- 吴守貴（2008）『鄂温克族社会歴史』民族出版社．
- 柳澤明（2007）「清朝統治期の黒竜江地区における諸民族の形成・再編過程の研究」『平成16～18年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書』．
- 中国国家民委編（2009）『鄂温克族社会歴史調査』民族出版社．